

私的自己意識および自己没入を上位概念 としたモデルにおける フォーカシング的経験テキスト改訂版と 構造拘束度との関連

高 沢 佳 司

〈要旨〉高沢（2022）のモデルでは、フォーカシング的態度の「注意」や、日常生活におけるフォーカシング的経験の「体験の感受」と構造拘束度の「反復性」との関連性について、上位概念に私的自己意識および自己没入を据えたモデルの検討を行った。本研究では従来のモデルにおいてフォーカシング的態度や日常生活におけるフォーカシング的経験で測定した変数を、日常生活におけるフォーカシング的経験尺度テキスト改訂版（上西, 2020）の「体験への注意と確認」および「体験の感受」に置き換えて、反復性および傍観性との関連性を検討した。その結果、体験の感受と反復性との有意な正の偏相関が見られ、体験への注意と確認と反復性との正の偏相関は非有意であった。これらの結果は従来のモデルの検証結果と一致した。また日常生活におけるフォーカシング的経験尺度テキスト改訂版と改定構造拘束度尺度の諸因子間における相関・偏相関は一部を除き先行研究と一致するものが見られた。日常生活におけるフォーカシング的経験と構造拘束度との関連性について議論がなされた。

〈キーワード〉構造拘束的な体験様式、日常生活におけるフォーカシング的経験、反復性、私的自己意識、自己没入

問題と目的

体験過程理論の尺度研究においてはフォーカシング的態度¹、日常生活におけるフォーカシング的経験²、および構造拘束的な体験様式³を測定する試みが盛んに行われてきた。例えば、フォーカシング的態度は体験過程尊重尺度（FMS；福盛・森川, 2003）、その改訂版（FMS-18；森川・永野・福盛・平井, 2014）、上西（2011）による同改訂版、青木（2012）による同英語版（FMS-a. j.）、河崎（2016）による同中国語版、日常的フォーカシング態度尺度（中谷・杉江, 2014）が開発されている。日常生活におけるフォーカシング的経験尺度はFES（上西, 2011）、同テキスト改訂版（FES-TR；上西, 2020）が開発されている。構造拘束的な体験様式については、構造拘束度尺度（高沢・伊藤, 2009）、同改訂版（高沢, 2018）が開発されている。これらの試みを総括すると、フォーカシング的態度・経験、および体験様式の理解を通じて、いかに心理的介入に活用するか、または実践場面で現前する現象をいかに理解するかについて検討する目的で行われていると言えよう。

中でも本研究における中心的な課題は、フォーカシング的態度や日常生活におけるフォーカシング的経験の諸因子と構造拘束度の反復性因子とが、正の相関を呈する背景要因についてである。Gendlin（1964）では体験様式が過程進行中⁴と構造拘束的との対比で論じられているため、フォーカシング的態度や日常生活におけるフォーカシング的経験は過程進行中の体験様式に対応するものと見なせる。それゆえ、理論的予測としてはフォーカシング的態度や日常生活におけるフォーカシング的経験と構造拘束度との間には負の相関関係が想定される。前述の正の相関はこれと矛盾するため、本研究を含めたその原因に着

-
- 1 「からだに注意を向けながらゆったりとした心構えで待つといった、ある種の態度」（福盛・森川, 2003）
 - 2 フォーカシング的態度を「個別の態度としてでなく、一連のプロセスを想定した経験として捉える」（上西, 2011）もの
 - 3 「体験過程の暗黙の機能が欠損してプロセスを排除した構造だけが存在し、体験過程が構造化され、また次第に構造そのものとなる」（Gendlin, 1964, p. 23）様式であり、ネガティブな思考内容が反復し（i.e., 反復性）それに対して傍観している（i.e., 傍観性）体験の仕方（高沢・伊藤, 2009；高沢, 2018）
 - 4 「体験過程が象徴との絶えざる相互作用のもとに自己の中でいきいきと作動している」（末武, 1986）体験の仕方

目する研究の流れが生まれた。例えば、FMS-18の注意因子と反復性（高沢, 2021）、FESの体験の感受因子と反復性（上西, 2012）との正の相関である。高沢（2022）でも同様の結果が得られている。単相関分析でこれら2つの正の相関が再現され、構造方程式モデリングでは注意と反復性との偏相関⁵は非有意であったが、体験の感受と反復性における有意な正の偏相関が見いだされた（高沢, 2022）。

こうした一連の結果については、注意と反復性、および体験の感受と反復性と別々の情報処理過程が介在すると考えられる。まず注意と反復性との偏相関が非有意となった点であるが、注意に対してポジティブ・ネガティブに関わらない全般的な私的側面への着目である私的自己意識（e.g., 辻, 1993）からの影響があったため、この私的自己意識が単相関における注意と反復性との有意な相関関係を生んでいた可能性がある。他方、体験の感受と反復性との偏相関については、上位概念としての私的自己意識や自己没入（e.g., 坂本, 1997）を統制しても有意であったため、例えば双方が心身症様の経験を捉えており、そのことが原因で概念的重複を生んでいる可能性がある（高沢, 2021, 2022）。あるいは自己のネガティブな側面に着目する理由として、ネガティブスキーマの存在が想定され、それが体験の感受と反復性との正の相関関係を生んでいるとも考えられる。

以上のような背景要因の検討が行われてきているが、より詳細な情報処理過程の特定の前に、残存する課題を解決することが先決であろう。その課題とは、前述のようにFES（上西, 2011）にはテキスト改訂版（FES-TR; 上西, 2020）があり、構造拘束度との関連性は未検討となっている。新規の尺度と既存の尺度との関連性の検討は、心理学的測定研究において重要な課題である。また体験過程理論における尺度研究においても、後続の研究を後押しする意味では基礎的な知見を提供できる点で有益と言えよう。また、高沢（2022）のような、私的自己意識・自己没入を上位概念とした体験の感受と反復性との正の偏相関問題についても、FESをFES-TRに置き換えても再現性が見られるかどうか検討することは、体験過程理論の検証が科学的視座に則って遂行されて

5 標準化偏回帰係数による。以下、本論中の「偏相関」とは同様のことを指す。

いることを打ち出すことともなる。

以上の議論から、本研究では（１）高沢（2022）で検討されたモデルにおけるフォーカシング的態度・経験の因子の役割を、FES-TRによって検討する。同時に、（２）FES-TRと構造拘束度との各因子得点同士の全般的な関連性についても検討する。

方法

1) 調査参加者

参加者は176名（女性106名、無回答2名）、平均年齢は20.17歳（SD = 1.28；無回答1名）であった。

2) 測定尺度

（１）私的自己意識・・・辻（1993）の自己意識尺度のうち、私的自己意識に関する5項目を用いた。参加者は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答した。

（２）自己没入・・・坂本（1997）の没入尺度（11項目）を用いた。参加者は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答した。

（３）日常生活におけるフォーカシング的経験・・・上西（2020）のFES-TR；28項目を用いた。因子の内訳は、体験の確認時間因子4項目、体験の感受因子5項目、体験過程の受容と行動因子6項目、体験的距離の調節5項目、閃き因子4項目、体験への注意と確認因子⁶4項目であった。参加者は「1. 全くあてはまらない」～「6. よくあてはまる」の6件法で回答した。

（４）構造拘束度・・・高沢（2018）のSSBE-R；16項目を用いた。因子の内訳は、反復性8項目、傍観性8項目であった。参加者は「1. 全くあてはまらない」～「7. 非常にあてはまる」の7件法で回答した。

6 高沢（2022）のモデル内での「注意」はFMS-18（森川ら，2014）の注意因子であったが、本研究ではFES-TR（上西，2020）の体験への注意と確認因子にて代替した。読者の中には本研究においても注意因子を同時に測定し検証する発想もあろうが、両者が類似の概念であることや、参加者の負担軽減の観点から省略した。

3) 手続き

調査はすべてオンラインで行われた。参加者は研究目的や倫理的配慮（データの厳重な管理、自由意志による参加、途中終了の自由、問題発生時のアフターフォロー、研究代表者の連絡先、結果の開示方法・場所、等）について熟読し、インフォームド・コンセントを得た後、質問紙に回答した。尺度の実施順序、および尺度内の質問項目の順序はカウンターバランスを取った。回答終了後、デブリーフィングを行い調査終了とした。

4) 解析ツール

フリーの統計解析マクロであるHAD（清水, 2016）を用いた。

結果および考察

1) 記述統計量、信頼性係数、単相関分析

記述統計量、 α 係数を算出した（表1）。信頼性に課題がある変数は見受け

表1. 記述統計量および信頼性係数

変数名	平均値	<i>SD</i>	α
私的自己意識	14.43	4.59	.76
自己没入	34.37	9.36	.88
体験の確認時間	13.10	5.19	.91
体験の感受	21.11	5.75	.85
体験過程の受容と行動	23.20	5.99	.83
体験的距離の調節	16.02	5.60	.84
閃き	15.28	4.27	.78
体験への注意と確認	12.87	4.35	.79
FES-TR	101.58	18.44	.87
反復性	38.02	10.36	.88
傍観性	27.98	9.33	.82
SSBE-R	66.01	16.31	.87

私的自己意識および自己没入を上位概念としたモデルにおける
フォーカシング的経験テキスト改訂版と構造拘束度との関連（高沢）

られなかった。続いて測定変数同士の単相関分析を行った（表2）。特に高沢（2022）で検討した、私的自己意識と自己没入を上位概念に据えたモデル内で取り扱った変数同士の単相関に着目すると、いずれも有意な正の相関となった。ただし、注意（森川ら, 2014）と体験への注意と確認（上西, 2020）では後者に「確認」が加わっており厳密な対応関係にはなっていない点に注意されたい。しかしながら、上西（2012）や高沢（2021, 2022）で検討されてきたフォーカシング的態度・経験、および反復性との有意な正の相関が再現された点は有益な結果と言える。

表2. 相関分析結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI
I. 私的自己意識	-										
II. 自己没入	.62****	-									
III. 体験の確認時間	.60****	.34****	-								
IV. 体験の感受	.40****	.54****	.19**	-							
V. 体験過程の受容と行動	.16*	-.15*	.39****	-.23**	-						
VI. 体験的距離の調節	-.02	-.43****	.21**	-.22**	.45****	-					
VII. 閃き	.33****	.11	.33****	.18*	.33****	.32****	-				
VIII. 体験への注意と確認	.56****	.44****	.45****	.51****	.18*	.06	.38****	-			
IX. FES-TR	.55****	.21**	.72**	.39****	.62****	.53****	.67****	.69****	-		
X. 反復性	.29****	.71****	.02	.49****	-.33****	-.51****	-.06	.25****	-.06	-	
XI. 傍観性	.27***	.31****	.04	.16*	-.27***	-.06	.02	.15*	-.01	.37****	-
XII. SSB-E-R	.34****	.63****	.04	.40****	-.36****	-.36****	-.02	.24**	-.04	.85****	.81****

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$, **** $p < .0001$

網掛け部分は高沢（2022）のモデルに関連する変数同士の相関である。

続いて、体験過程の受容と行動と反復性、および体験的距離の調節と反復性とがそれぞれ有意な負の相関が見られた。この点は上西（2012）で見られた体験過程の受容と行動と反復性、および間が取れていると反復性との有意な負の相関と対応する結果と言えよう。こうした一部のフォーカシング的態度・経験と反復性との関連性については、再現性のある現象である点も基礎的な資料を提供するものと言える。

さらに、FESを用いた上西（2012）の研究では確認されなかった体験の感受と傍観性との有意な正の相関、体験過程の受容と行動と傍観性との有意な負の相関が見られた。因果関係の有無や方向性は定かではないにしろ、こうした関係性の解釈について述べたい。まず前者の関連性については、傍観的な体験

の仕方をしている場合に、我々はある程度体験の感受、ないしは内臓的に経験される心身症様の体験が同時に起こっているが、言語化・意識化はなされない可能性がある」と解釈できる。ただし、相関係数が.20を下回っており、Guilford（1956）の基準に照らすと、ほぼ無視して差し支えない程度の関係性と言えよう。続いて後者の関係性であるが、傍観的な体験の仕方をしている場合には、体験過程を受容しそれに基づいて行動することも同時に困難になっている可能性がある」と解釈できる。また、そもそも傍観性と他の変数との相関が有意になったもう一つの理由としては、構造拘束度尺度（高沢・伊藤, 2009）が改訂され（高沢, 2018）、傍観性の項目が8項目に増加したことで、測定の安定性も増したことも考えられる。

FES-TR（上西, 2020）を用いた本研究では、旧版（上西, 2011）へ新たに追加された体験への注意と確認と傍観性との有意な正の相関も見られた。こちらも相関係数が.20を下回っており、前述の理由から積極的に支持できない結果である。あり得る解釈としては、傍観的な体験の仕方をしている場合こそ、身体感覚を頼ろうと動機づけられた結果、体験への注意や確認の得点も引き上げられる可能性がある。この解釈も、本研究では因果関係までは特定できないため、より詳細な検討は後続の研究に譲りたい。

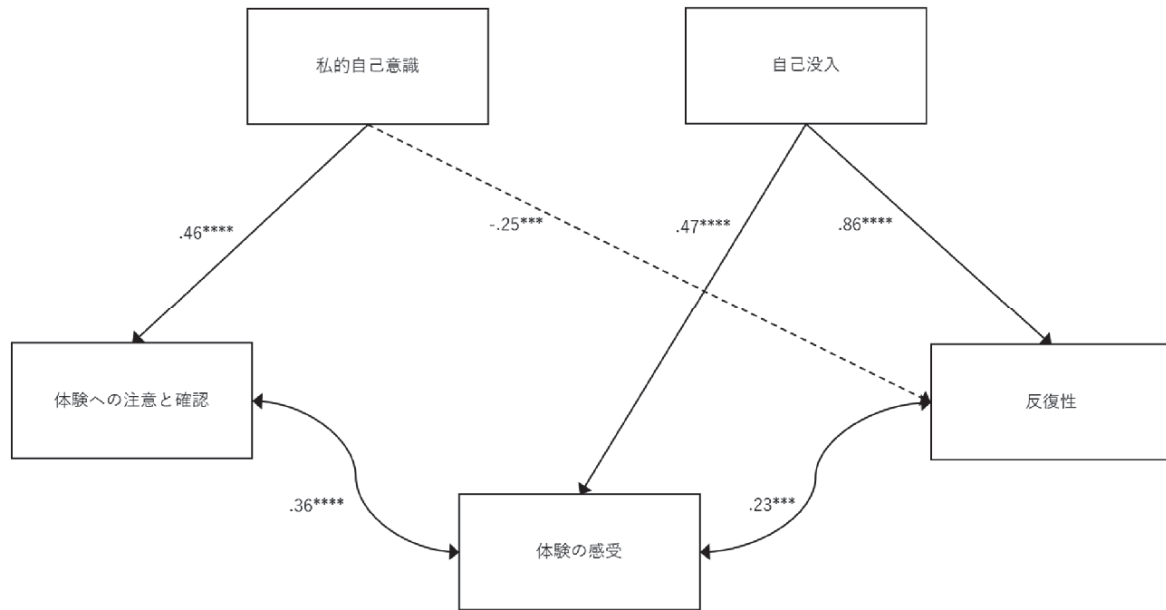
2) 構造方程式モデリングによる分析

結果の簡略化のため、図中の説明変数同士の相関、目的変数の誤差項、および非有意・有意傾向のパスは省略した。また、係数が.20を下回るパスについては非有意扱いで解釈した。

(1) 高沢（2022）のモデルとの比較

私的自己意識および自己没入を説明変数、体験への注意と確認、体験の感受、反復性を目的変数とした構造方程式モデリングによるパス解析を行った（図1）。適合度指標からはモデルの適合について大きな問題は見受けられなかった（ $\chi^2(10) = 388.10, p < .0001, CFI = 1.000, RMSEA = .000$ ）。高沢（2022）のモデルと類似した結果として、私的自己意識は体験への注意と確認

私的自己意識および自己没入を上位概念としたモデルにおける
フォーカシング的経験テキスト改訂版と構造拘束度との関連（高沢）



Note. $*** p < .001$, $**** p < .0001$

説明変数同士の相関、目的変数の誤差項、および非有意・有意傾向のパスは省略した。実線は正のパス、破線は負のパスを示す。係数は直近右側の線に対応する。

図 1. 高沢(2022)との比較のための構造方程式モデリング結果

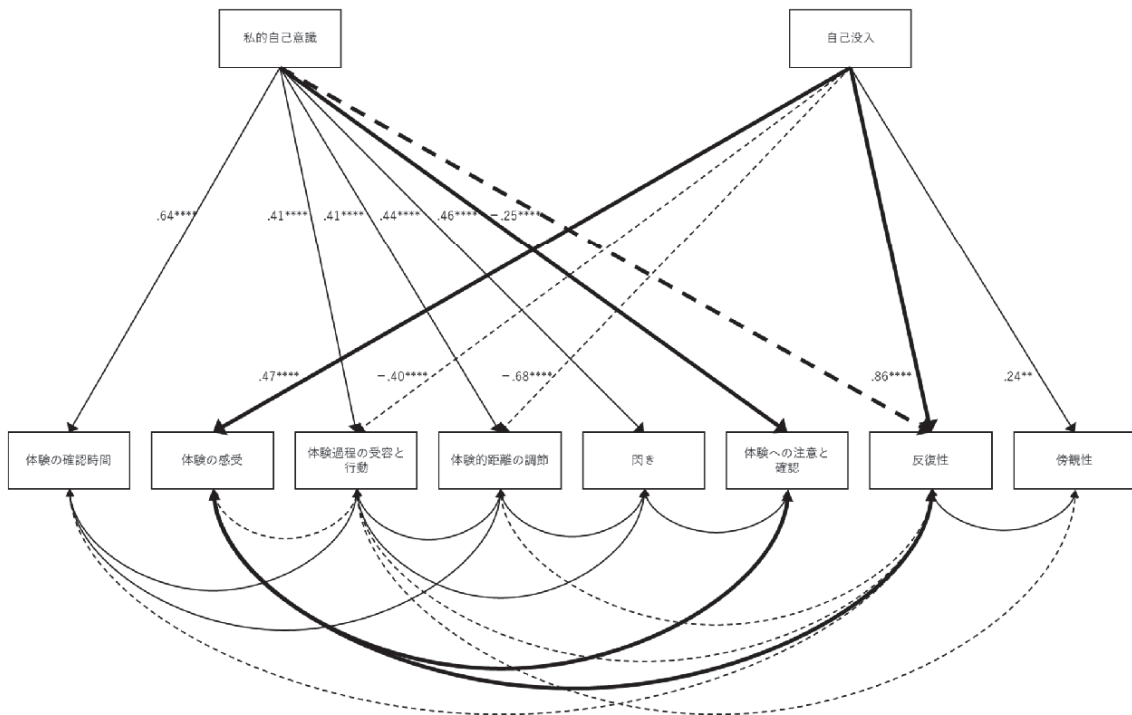
を有意に予測するのに対し（標準化解 = $.46$, $p < .0001$ ）、体験の感受は予測しないことが明らかとなった（標準化解 = $.11$, $p = .18$ ）。一方、私的自己意識は反復性を有意に予測しており（標準化解 = $-.25$, $p < .001$ ）、前回のモデルと異なる結果が得られた。続いて自己没入の影響は前回のパターンを踏襲しており、それぞれ体験の感受（標準化解 = $.47$, $p < .0001$ ）、反復性（標準化解 = $.86$, $p < .0001$ ）を予測するが、体験への注意と確認は予測しなかった（標準化解 = $.15$, $p = .054$ ）。

目的変数同士の偏相関に着目すると、体験の感受と反復性との偏相関は $p^r = .23$, ($p < .01$)、体験への注意と確認と体験の感受との偏相関は $p^r = .36$, ($p < .0001$) と有意であったが、体験の感受と注意と反復性との偏相関は非有意であった ($p^r = .01$, $p = .87$)。体験への注意と確認と体験の感受が有意となった点を除いて、前回のパターンを踏襲する結果となった。

(2) (1) で未使用であった変数を全て投入したモデル（以下、拡張モデル）の検討

私的自己意識および自己没入を上位概念としたモデルにおける
フォーカシング的経験テキスト改訂版と構造拘束度との関連（高沢）

前項では高沢（2022）のモデルの追加検証のため、FES-TRにおける体験の感受・体験への注意と確認を用いて構造方程式モデリングを行った。本項ではこのモデルを拡張し、FES-TRの6因子とSSBE-Rの2因子すべてを目的変数、上位概念として私的自己意識・自己没入を据えた拡張モデル（図2）の検討を行った。この拡張モデルを解析することにより、これまで未検討であった因子同士の偏相関を探索的に検討することができる。なお、前項ですでに検討した部分のパスは本項での分析結果と一致するため言及しない。



Note. ** $p < .01$, **** $p < .0001$

説明変数同士の相関、目的変数の誤差項、および非有意・有意傾向のパスは省略した。実線は正、破線は負、太線は既存のモデルと対応したパス・相関を示す。係数は直近右側の線に対応する。見やすさを優先し、目的変数同士の偏相関に関する係数・アスタリスクは省略し、表3に示した。

図2. 拡張モデルに関する構造方程式モデリング結果

構造方程式モデリングの結果、適合度指標からはモデルの適合について大きな問題は見受けられなかった ($\chi^2(45) = 767.98, p < .0001, CFI = 1.000, RMSEA = .000$)。上位概念からのパスに着目すると、単相関分析の結果（表2）と異なる部分が見られた。私的自己意識に関しては、単相関分析で係数が.20を下回った体験過程の受容と行動へのパス（標準化解 = .41, $p < .0001$ ）、体験的距離の調節へのパス（標準化解 = .41, $p < .0001$ ）が有意となり、逆に

傍観性へのパス（標準化解 = .12, $p = .19$ ）は非有意となった。自己没入に関しては、単相関分析で係数が.20を下回った体験過程の受容と行動へのパスが有意（標準化解 = -.40, $p < .0001$ ）となり、逆に単相関分析で有意であった体験の確認時間へのパスは非有意となった（標準化解 = -.06, $p = .41$ ）。

表3には拡張モデルの検討時に算出した目的変数同士の偏相関係数を示した。まず高沢（2022）のモデルに関連した係数（網掛け部分）、つまり体験の感受、体験への注意と確認、および反復性との関連性について触れたい。分析の結果、高沢（2022）のモデルと同様のパターンが得られ、体験への注意と確認と反復性との間の偏相関は非有意（ $p^r = .01$, $p = .86$ ）となり、体験の感受と体験への注意と確認（ $p^r = .36$, $p < .0001$ ）、体験の感受と反復性（ $p^r = .23$, $p < .01$ ）との間に有意な正の偏相関が得られた。単相関分析では体験への注意と確認と反復性との間の相関は有意であったため、この点については偏相関と異なる結果となった。

表3. 目的変数同士の偏相関分析結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII
I. 体験の確認時間	—						
II. 体験の感受	-.04	—					
III. 体験過程の受容と行動	.38****	-.22**	—				
IV. 体験的距離の調節	.29***	-.03	.36****	—			
V. 閃き	.16*	.12	.27***	.33****	—		
VI. 体験への注意と確認	.19*	.36****	.16*	.199**	.27***	—	
VII. 反復性	-.21**	.23**	-.25**	-.26***	-.11	.01	—
VIII. 傍観性	-.15*	-.02	-.29***	.05	-.05	-.03	.26***

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$, **** $p < .0001$

網掛け部分は高沢（2022）のモデルに関連する変数同士の偏相関である。

IVとVIとの相関のみ小数第3位まで示した。

続いて表3の網掛け以外の部分において、特に反復性・傍観性とFES-TRの諸因子との関連性について言及したい。まず反復性との有意な負の偏相関が得られたFES-TRの因子は、体験の確認時間（ $p^r = -.21$, $p < .01$ ）、体験過程の受容と行動（ $p^r = -.25$, $p < .01$ ）、および体験的距離の調節（ $p^r = -.26$, $p <$

.01) であった。そのうち、単相関分析の結果と一致するのは後者2つの因子であった。体験の確認時間は単相関分析の結果からは反復性との関連性は見られなかったが、他の変数からの影響を統制した結果、両者の関連性が明確になったと言えよう。また、傍観性との負の偏相関が見られたのは体験の確認時間 ($p^r = -.15, p < .05$)、および体験過程の受容と行動 ($p^r = -.29, p < .001$) であった。ただし前者は係数が.20を下回っており安定した結果ではないと解釈する。その他の組み合わせにおいては、.20を下回るが有意な係数を考慮に入れなければ、単相関と偏相関との結果が概ね一致していると言えよう。

考察

本研究の目的は、(1) 高沢 (2022) で検討されたモデルにおけるフォーカシング的態度・経験の因子の役割を、FES-TRによって検討すること、および(2) FES-TRと構造拘束度との各因子得点同士の全般的な関連性について検討することの2つであった。以下、目的ごとに考察を述べたい。

1) 高沢 (2022) のモデルと本研究との比較

本研究で検討したモデルは高沢 (2022) のモデル内で用いられた注意を体験への注意と確認に置き換えたものであった。分析の結果、体験の感受と反復性との正の偏相関が再現された。また、体験への注意と確認と体験の感受との間の正の偏相関が有意となり、高沢 (2022) のモデルにおける注意と体験の感受との偏相関が非有意であったことを踏まえると、新たな知見と言える。

体験の感受と反復性との関連性については、上位概念からの影響を統制しても偏相関が有意なままであったことがポイントとなるであろう。具体的には、私的自己意識が反復性へ、自己没入が体験の感受と反復性へとそれぞれ有意な影響を与えていたにもかかわらず、それ以外の成分が両変数間の分散を共有させる原因となっていると見なすことが妥当である。すなわち、私的自己意識や自己没入のみでは、この関連性についての説明は不十分である。私的自己意識・自己没入のように、自己の内面への集中的な注意を払うことは、一見して体験の感受と反復性との共通点の源泉のように捉えられる。しかしながら、体

験の感受と反復性との偏相関が依然として有意になっているということは、他の要因が未だ大きく介在することを示唆している。本研究ではこの部分の偏相関を生む原因について明らかにすることはできないが、心身症様の経験が上位概念となり双方の関連性を生んでいるという高沢（2021, 2022）の定式化の妥当性を検討することや、心身症様の経験に限らず他の心理学的概念による代替説明が可能かどうか検討することが、次の研究課題と言えよう。

続いて体験への注意と確認と体験の感受との間の正の偏相関が有意であった点については、FMS-18（森川ら, 2014）の注意とFES-TR（上西, 2020）の体験への注意と確認では測定する概念の範囲に違いがあるためと単純に解釈可能である。つまり、確認する方略が感受する経験と連動しているからこそ、分散を共有したと見なすことができる。

私的自己意識が反復性へ負の影響を与えていた点については、本研究ならびに高沢（2021, 2022）においても何ら予測していない結果であり、説明のための理論的背景に乏しい。ゆえにその原因については明らかにすることは困難である。この点については他の研究に譲りたい。

2) FES-TRと構造拘束度との因子得点同士の相関・偏相関

本研究ではFES-TR（上西, 2020）と改訂構造拘束度尺度との相関・偏相関についても検討した。表2に示した通り、体験の感受と反復性、および体験への注意と確認と反復性との有意な正の相関が見られた。一方、体験過程の受容と行動、および体験的距離の調節と反復性との負の相関については理論的予測通りの結果であり、また上西（2012）の相関分析の結果とも概ね一致する⁷。同様に、体験過程の受容と行動と傍観性との負の相関もまた理論的予測と一致する。偏相関については私的自己意識・自己没入による影響を統制したものであったが、体験の感受と反復性との正の偏相関は有意なままであった。他方、体験の確認時間、体験過程の受容と行動、体験的距離の調節と反復性との負の偏相関が有意であり、傍観性については体験過程の受容と行動との負の偏相関

7 上西（2012）のFESではFES-TR（上西, 2020）の体験的距離の調整に相当する因子は「間が取れている」と命名されている。本研究では両者が同様の現象を捉えていると解釈する。

が見られた。その他、非有意となった相関係数や絶対値が.20を超えないものについては割愛する。

先行研究を今一度確認すると、高沢（2021）ではFMS-18（森川ら, 2014）の注意と反復性との間に、高沢（2022）ではFMS-18（森川ら, 2014）の注意と反復性、およびFES（上西, 2012）の体験の感受と反復性との間に有意な正の相関が、体験の感受と反復性との有意な正の偏相関が見られている。本研究の結果も含め、一連の研究の流れを外観すると問題となる一部のフォーカシング的態度・経験に関する変数と反復性との正の相関関係は再現性があることが示唆された。また相関分析のみならず偏相関分析（構造方程式モデリング）による検討でも一部同様の結果が得られることから、特に体験の感受と反復性との関連性は頑健性のある現象と言えよう。

このように再現性・頑健性のある現象として、一部のフォーカシング的態度・経験と反復性との正の相関・偏相関が見られることから、その源泉を探索的に検討し、実践への応用をも視野に入れることはまさに基礎研究と応用研究とを結ぶ鍵となる。面接中のある時間（あるいは日常生活において）は体験過程が過程進行中のものとなったり、構造に拘束されたりすることは想像に難くないが、その背景、つまりクライアントの内面で生起している情報処理過程をその場で捉えることは一般に困難を伴う。ゆえに基礎研究が事前にその知見を提供し、実践者の下支えをしなくてはならない。本研究を含めた一連の研究で、このような知見を発見することを狙うものである。

3) 本研究の限界と今後の課題

以上のように本研究では高沢（2022）のモデルにおける体験の感受と反復性、および注意と反復性との偏相関について、FES-T-R（上西, 2020）を用いて検討してきた。同時に、両尺度の因子得点間の全般的な相関関係についても検討してきた。本研究では日常生活におけるフォーカシング的経験の一部の因子と構造拘束度がなぜ正の相関・偏相関を示すかについて、その源泉を完全に明らかにすることはできなかった。繰り返し述べてきたように、今後は上位概念に心身症様経験の程度を含めた他の心理学的概念を据えて踏査することが望

まれる。

謝辞

大阪大谷大学、上西裕之准教授から「体験への注意と確認」の英訳についてご教授頂きました。また、本学豊住誠教授、クリストファー・メイヨー教授から英文要旨の校閲をして頂きました。ここに記して御礼申し上げます。

引用文献

- 青木剛. (2012). FMS ver.a.j の妥当性と信頼性の検討. 関西大学臨床心理専門
大学院紀要, 2, 33-41. <http://hdl.handle.net/10112/00018719>
- 福盛英明・森川友子. (2003). 青年期における「フォーカシング的態度」と精神的
健康度との関連「体験過程尊重尺度」(The Focusing Manner Scale; FMS)
作成の試み. 心理臨床学研究, 20, 580-587. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40005722773>
- Gendlin, E. T. (1964). A theory of personality change. P. Worchel & D. Byrne.
Eds., *Personality change*, 100-148. John Wiley & Sons. http://previous.focusing.org/pdf/personality_change.pdf
- Gendlin, E. T. (1981). *Focusing 2nd* Ed. Toronto: Bantam Books.
- Guilford, J. P. (1956). *Fundamental statistics in psychology and education*.
New York: McGraw Hill.
- 河崎俊博. (2016). 中国におけるフォーカシング的態度に関する数量的研究—
中国語版体験過程尊重尺度作成への試み— サイコロジスト：関西大学臨床
心理専門職大学院紀要, 6, 29-37.
- 増井武士. (1990). フォーカシングの臨床適用に関する考察—その新しい視点
と将来的な課題について—. 人間性心理学研究, 8, 56-65.
- 森川友子・永野浩二・福盛英明・平井達也. (2014). FMS (The Focusing
Manner Scale) 改訂版の作成および信頼性と妥当性の検討, 九州産業大学国
際文化学部紀要, 58, 117-135. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40020224215>
- 中谷隆子・杉江征. (2014). 日常的フォーカシング態度尺度の開発およびその
信頼性・妥当性の検討—内的プロセスモデルの検証. 心理臨床学研究, 32,

- 250-260. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40020151173>
- 坂本真士. (1997). 自己注目と抑うつの社会心理学. 東京大学出版会
- 清水裕士. (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- 末武康弘. (1986). 人格およびその変化をめぐる理論的課題－ロジャーズ派人格理論の推移の検討を中心として. 教育方法学研究, 7, 139-159. https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=23499&file_id=17&file_no=1
- 高沢佳司・伊藤義美. (2009). 構造拘束度尺度の作成および妥当性・信頼性の検討. 心理臨床学研究, 27, 603-611. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40016946521>
- 高沢佳司. (2018). 構造拘束度尺度の改訂および妥当性・信頼性の検討. 愛知学泉大学・短期大学紀要, 53, 81-91. <http://id.nii.ac.jp/1155/00001026>
- 高沢佳司. (2021). 改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証. 皇學館大学紀要, 59, 59-75. <http://id.nii.ac.jp/1543/00000427/>
- 高沢佳司. (2022). フォーカシング的態度における諸因子と反復性との正の相関に関する一考察—私的自己意識および自己没入を上位概念としたモデルの検討—. 皇學館大学紀要, 60, 77-87. <http://id.nii.ac.jp/1543/00000714/>
- 辻平治郎. (1993). 自己意識と他者意識. 北大路書房
- 上西裕之. (2011). 日常生活におけるフォーカシング的経験の構造に関する一考察—フォーカシング的経験尺度の開発とその構造の分析—. 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 2, 91-100. <http://hdl.handle.net/10112/4887>
- 上西裕之. (2012). 日常生活におけるフォーカシング的態度と構造拘束度との関連. 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 3, 65-73. <http://hdl.handle.net/10112/8023>
- 上西裕之. (2020). 日常生活におけるフォーカシング的経験尺度テキスト改訂版の検討. 関西大学心理臨床センター紀要, 11, 11-21. <http://hdl.handle.net/10112/00019913>

The Relationship between Focusing Experience Text-Revised and Structure-Bound Experiencing in a Model that Includes private Self-Consciousness and Self-Preoccupation as Superordinate Concepts

Keiji TAKASAWA
(Kogakkan University)

Abstract

In the model shown in Takasawa (2022), the relationship among "attention" in Focusing Attitudes and "sensitivity to experience" in Focusing Experiences and "repetition" in the Structure-Bound Experiencing, with private self-consciousness and self-immersion as superordinate concepts, was examined. In this study, the variables measured by Focusing Attitudes and Focusing Experiences in the previous model were replaced with "attention to and confirmation of experience" and "sensitivity to experience" from the Focusing Experiences Scale T-R (Uenishi, 2020), and their relationships to repetition and to remaining-on-the-sidelines were examined. Results showed significant positive partial correlations between "sensitivity to experience" and "repetition", and non-significant partial correlations between "attention and confirmation of experience" and "repetition." These results were consistent with these of the previous model validation. Correlations and partial correlations between the Focusing Experiences Scale T-R and the Scale for Structure-Bound Experiencing-Revised were consistent with previous studies, with some exceptions. The relationship between Focusing Experiences and Structure-Bound Experiencing was discussed.

Keywords : structure-bound manner, focusing experience, repetition, private self-consciousness, self-preoccupation